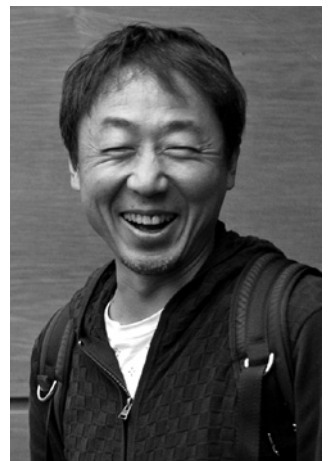


土木と建築のベクトルを 組み合わせる

「取材協力者」西村浩氏

正会員

建築家、(株)ワークヴィジョンズ代表取締役、
(株)リノベリング取締役



西村浩氏
NISHIMURA Hiroshi

1967年佐賀県生まれ。1993年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了。建築設計事務所勤務を経て1999年にワークヴィジョンズ一級建築士事務所を設立。現在は都市再生戦略の立案、建築・リノベーション・土木分野の企画・設計、まちづくりのディレクション、などを意欲的に実践する。日本建築学会賞(作品)、土木学会デザイン賞、BCS賞、フルネル賞、グッドデザイン賞 ほか多数受賞。

土木出身でありながらも現在は土木とは少し離れた分野でご活躍されている方に焦点を当てる学生企画「土木出身の力とは!?」。第2回は(株)ワークヴィジョンズ代表取締役であり、建築家の西村浩氏にお話を伺いました。土木を専攻した後に建築家としての道を選択した西村氏を突き動かした原動力について探ります。

土木で感じた物足りなさ、 建築へのコンプレックス

——大学で土木を専攻した後に、建築家としての道を進まれた経緯を教えてください。

西村——もともと建築が好きで、建築のかっこよさに憧れて建築学科への進学も迷っていました。一方、当時は本州四国連絡橋や東京湾横断道路をはじめとするいわゆる「1兆円プロジェクト」が計画中で、橋梁が土木の世界での「花形」だったのです。そういう

ものをデザインできる、まさに「地図に残る仕事」に魅せられて土木工学科への進学を決め、橋梁研究室に所属したわけです。

しかし実際に土木を学んでみると、僕が思い描いていたデザインの世界とは少し違っていました。当時の土木にはデザインという概念がほとんどなかったのです。だから当然、土木のデザインや景観を生業として実践している先輩も数少ない状況でした。建築家という職が確立され、学生もデザインを盛んに行っている建築に対し、土

木にも同じ世界があるかと思いきや、まったくそうではなかったのです。

土木を専攻しつつも何とかデザインがやりたいとさまざまな建築作品を見てまわり、大学院ではお隣の建築学科に入り浸りでした。学生として土木でデザインや景観の勉強ができない不満と、建築に対するコンプレックスの固まりだったわけです。大学院卒業後は、当時バイトをしていた建築設計事務所に就職しました。この時は、1年度土木から離れることになったのです。

——その後、土木関連のお仕事もすることになったきっかけは何だったのでしょうか。

西村——建築設計事務所では約5年半、住宅や公共施設の設計をメインにやっていました。その後、1999年

に独立し、ワークヴィジョンズを設立しました。アトリエ系と言われる設計事務所と同じように建築関係の仕事で生きていこうと思い独立したのですが、住宅の設計1件だけでスタートしたため、構造・設備の設計を協力事務所にお願いと残る収入はわずか。1年目は年収50万円くらいの船出で、当時は就職情報誌を横目で見ながらやっていました。今思えば良い思い出です。

土木とは離れて建築の設計をやっていたのですが、土木に戻るきっかけとなったのは大学の恩師の一人である篠原修先生からのお声かけでした。当時、土木業界にデザインができる人材が不足している中、「もともと土木出身なのだから、こんな仕事をやってみたらどうだ」とありがたい言葉をいた



写真1 都市景観大賞(景観まちづくり活動・教育部門)を受賞した福島県立桐桜高校でのデザインワークショップの様子

だき、中学・高校時代を過ごした長崎の水辺の森公園にかかる六つの小さな歩道橋の設計に関わることになったのです。もう1度自分のルーツである土木でデザインを考えられる状況に巡り会えたのは、今考えると非常に幸運なことだったと思います。土木と建築の両方を経験できたことは、今の僕の事に大きく影響しています。

土木のベクトルと建築のベクトル

土木と建築の両方を経験されたからこそわかる、二つの違いとはなんでしょうか。

西村——まず、扱う単位が違います。

たとえば建築ではミリからメートル単位の長さを扱いますが、土木ではメートルからキロまでを扱います。また、建築は対象敷地の大きさによってデザインの規模が定まると、ミリ単位の高精度なディテールに向かってデザインが進んでいきます。一方で土木は1ヶ所の敷地から始まったデザインが、隣のエリア、また隣のエリアと広がっていくという特徴を持っています。いわば、建築は内向きのベクトル、土木は外向きのベクトルです。

——その経験は現在のお仕事にどのように活かされているでしょうか。

西村——現在は土木の景観設計や建築の設計のほか、土木と建築の真逆のベクトルをうまく組み合わせ、都市再生戦略の立案やまちづくりのディレクション、デザインワークショップの開催などにも取り組んでいます。

たとえば、現在取り組んでいる佐賀県の「わいわい!! コンテナ」プロジェクトは、佐賀県出身の僕に「まちを何とかしてほしい」という依

頼が来たのが始まりでした。僕が昔迷子になっていた、お店がびっしりと詰まった商店街は、今は建物が壊され空き地や駐車場ばかりになってしまっていたのです。この流れをどうにか断ち切ろうと思ひ、社会実験として中心市街地の空き地に芝生を張って広場をつくり、そこに読書などが楽しめるコンテナを設置することにしました。すると、飲み屋街の顔をしていた中心市街地に子どもたちや親子連れが遊びに来て、まちのユーザーが少しずつ変わってきました。それに伴って、広場周辺には新たなお店が開業するなど、まちの未来を感じさせるような波及効果が生まれてきたのです。広場やコンテナのディテールをデザインする建築のベクトルと、周辺地域の活性化まで拡張させていく土木のベクトルの両方を組み合わせた結果だと思ひます。

土木と建築の分野を超えて

——今では土木と建築をどのように見ているのでしょうか。

西村——僕の中では土木と建築を意識することはまったくなくなっていました。昔は、土木と建築それぞれ

で仕事ができればいいという考えだったのですが、今では、このまちが良くなるにはどうしたらいいだろうか、分野を超えてフラットに考えられるようになりました。

これからの時代、まちを良くするという問題に対して土木と建築のそれぞれの専門家がただ単独に仕事をしているだけでは解決できないのではないかと思います。複雑化する社会問題に対して、土木や建築などの分野を超えて複眼的な視点から提案できる人間が、この土木の中から育っていかないとけないと思ひますね。

——若い世代の読者に向けてメッセージをお願いします。

西村——今振り返って考えてみると、学生時代の土木への不満や建築へのコンプレックスがモチベーションにつながり、自分を突き動かしていたのだと思ひます。それがなければ、今の自分が今の仕事が存在していないわけですから。ですので、自分のモチベーションとして何を一番に不満と思うのか、悩みは何なのか、そして何をやりたいのか、ということを仲間とともにぜひ考えてみるべきだと思ひます。
(担当編集委員…神谷啓太、中川拓朗)